

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 辻 秀雄

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 巽 孝之
文学研究科委員、Ph.D.

副査 上智大学文学部英文学科教授 飯野友幸 Ph.D.

副査 スタンフォード大学人文学部英文科教授／アメリカ研究専攻主任
シェリー・フィッシャー・フィッシュキン (Shelley Fisher Fishkin) Ph.D.

論文題目

主論文 Hemingway, the Extraterritorial: Style of Relation and the Rise of Hardboiled Modernism

(脱領域的作家ヘミングウェイ—関係性のスタイルとハードボイルド・モダニズムの創出)

副論文 Queer Realism vs. Hardboiled Modernism: Henry James's 'The Beast in the Jungle' and Ernest Hemingway's "The Battler"

(クイア・リアリズム対ハードボイルド・モダニズム—ヘンリー・ジェームズの「密林の野獣」とアーネスト・ヘミングウェイの「ボクサー」)

<文学>の脱領域—A Farewell to Armsにおける翻訳、二重国籍、ハードボイルド

辻秀雄君の本論文は近年のアメリカ文学研究の文脈およびモダニズム研究の成果を踏まえつつ、アーネスト・ヘミングウェイ (1899-1961) の初期作品群を読み直し、その文体の「関係性」を新たに理論化するものである。

ヘミングウェイ研究は従来、伝記研究的手法を取ることがほとんどであったが、本論文は、作家研究の枠にとらわれずアメリカ文学史の多文化的深層を意識しながら同作家の文体を再評価する、独創的かつ思索的な研究である。

その全体は、序章と結論を含め7章から構成されている。

Introduction

Chapter 1: Extraterritorializing Literature: Translation, Dual Nationality, and the Hardboiled in *A Farewell to Arms*

Chapter 2: Cuba Libre at Odds: *To Have and Have Not* and "Colonial Hybridity"

Chapter 3: Queer Realism vs. Hardboiled Modernism: Henry James's "The Beast in the Jungle" and Ernest Hemingway's "The Battler"

Chapter 4: Was Jake Black?: Hardboiled Style and the Language of Miscegenation / the Miscegenation of Languages

Chapter 5: Politicizing Style: The Black Hardboiled in Wallace Thurman's *Infants of the Spring*

Conclusion: Why Style Matters: Stylization and Conspicuousness

Bibliography

論文の概要

ヘミングウェイ文学といえば、その最も顕著な特徴のひとつに決まってハードボイルド・スタイルが挙げられる。しかしながら、そのスタイルそのものの性質や成り立ちについて踏み込んだ検証は、これまでほとんどなされていない。こうした状況をふまえ、具体的なテキストの読解、解釈とともにスタイルという現象を理論的に再定義するのが本論文の主要テーマである。本論文は、ヘミングウェイのハードボイルドな文体を実証主義的に定義するのではなく、それを彼が生きた時代における様々な利害関係が葛藤する場として捉え直し、その交渉の過程を記述する。一般的に作家や作品が持つ固有の美学的価値を指す語であるスタイルを、様々な関係、葛藤、交渉の場として再考していく。

スタイルの関係性を強調するために、本論文はジョージ・スタイナーが提示した「脱領域」(the extraterritorial)の概念を刷新しつつ用いる。スタイナーのエリート主義的、ヨーロッパ中心主義的視点を修正しながら、脱領域の概念を今日的なアメリカ文学研究の文脈に再導入することで、文学言語と多様な社会的、文化的境界との接点をより明確にする。昨今のモダニズム文学研究において盛んに議論される人種の問題、ポストコロニアリズム批評が着目する植民者と被植民者の交渉と葛藤、さらに、近年のアメリカ研究が試みるアメリカ文化・文学の国際的、間国家的文脈においての再定位、これらの争点と文学スタイルとを結びつけた点が、本論文がモダニズム研究に果たした一つの貢献である。

イントロダクションでは従来のヘミングウェイ研究におけるスタイルの意味づけが概括され、そこに現れる多様性や二律背反性が明らかにされる。また、昨今の批評家たちが、形式的特徴という旧来のスタイル理解を超えて、それを動的な過程として捉え始めていることが指摘される。こうした批評の動向にかんがみ、さらに美学・倫理学の分野で提示されたスタイル理解を参照することで、スタイルが他／多との関係性において自らを変革していく過程であることを確認し、本論文が拠って立つ理論的足場を整理する。

第一章は、文学言語の脱領域的創造がヘミングウェイのハードボイルド・スタイルの創出に深く関わることを、*A Farewell to Arms* (1929)、邦題『武器よさらば』を具体的に解釈し直しながら検証するものである。ヴァルター・ベンヤミンや後の批評家たちの翻訳論を参照することで、一般的には文学作品や作家の固有の美学的価値として評価される文体が、ヘミングウェイのハードボイルド・スタイルに関しては、実は翻訳という国際的かつ間国家的な状況のなかで生まれた可能性があることを具体的に分析する作業が、その中核を成す。

第二章は、いままで議論の対象になることが少なかったヘミングウェイの第四長編、*To Have and Have Not* (1937)、邦題『持つと持たぬと』をポストコロニアルな視点から再読した。本作品はヘミングウェイが書いた小説で最悪のもの、という負の評価がすっかり定着し、批判の矛先は特にそのまとまりのない構成に向けられてきた。一方、『持つと持たぬと』をヘミングウェイが書いた最もハードボイルド的な小説とする、ある種肯定的な評価も散見される。『持つと持たぬと』

のハードボイルドな言語の使用を詳細に吟味し、小説内部でハードボイルドな言語が崩壊する瞬間を突き止めることで、小説の表面に現れる構成上の断絶は、実はこのテキストが埋め込まれた植民関係に深く根ざしていることが論じられる。

第三章は、ヘミングウェイの凝縮された簡潔な文体とヘンリー・ジェイムズの華麗で複雑な文体を対比させながら、それぞれの文体が両文学の特性、価値観をいかに体現しているかを詳述する。この作業に有効な視座を与えるのが、セクシュアリティの有り方を反本質主義的な方法で記述する可能性を模索してきたクイア理論の批評的知見である。セクシュアリティ、あるいはクイアな要素や現象がテキストに立ち現れる位相を探ることで、ジェイムズの文学とヘミングウェイの文学のそれぞれの働きかけ、読者への作用が確認される。

第四章は、白人モダニスト作家ヘミングウェイの文体における人種的な含意に焦点を充てている。しかし、このような視点で*The Sun Also Rises* (1926)、邦題『日はまた昇る』のテキストに対峙するならば、まさしく人種という概念自体の再考が促されるだろう。すなわち、人種の言説における「カラー・ライン」の論理が、テキスト上においても、批評行為の認識の地平においても、人種間の接点を強制的に分断してしまっていることに気付かされるのである。一方、本章はヘミングウェイの他の作品においては人種の概念がいかに曖昧かつ恣意的であるかをも、明らかにする。ヘミングウェイ文学に繰り返し登場する黒人ボクサーの表象の系譜における様々な人種の概念の揺らぎを辿ることで、ヘミングウェイのテキストに記録された人種言説の推移が考察される。同時に、一見人種的なステレオタイプを再演しているかにみえる『日はまた昇る』において、表面的な人種の言説が実はテキストの深層にある間人種的な想像力を隠蔽する倒錯が起きている可能性が指摘される。テキスト上の人種表象とはまた違った次元で、マーク・トウェインの流れを汲むヘミングウェイの文学言語がそもそも人種的混淆を前提として持ち合わせていたことが明らかにされる。

第五章は、ハーレム・ルネッサンスの作家の一人、Wallace Thurmanの*Infants of the Spring* (1932) とヘミングウェイの『日はまた昇る』の接点をスタイルを通じて探り、それが両者のインターフェイスとして機能することを明らかにする。すなわち、スタイルは両者のはざまにあってそれらを分け隔てていると同時に、両者を橋渡しする機能をも備えているのである。さらに、ヘミングウェイの寡黙を旨とするハードボイルド・スタイルが、サーマンにとって人種やセクシュアリティといったアイデンティティの受け皿となる重要性を持っていたことが論証される。

結論では、テキストといった近接する概念との差異から再度スタイルが理論化され、それが様々な文化的、社会的な関係、葛藤、交渉の場であることが再確認される。また、トウェインやガートルード・スタインとの比較、あるいは本論文が扱っていないノンフィクションものを題材とすることによって、ヘミングウェイのスタイル研究がさらなる広がりを持つ可能性が示唆される。

審査の要旨

辻秀雄君の博士論文*Hemingway, the Extraterritorial: Style of Relation and the Rise of Hardboiled Modernism*は、アメリカにおけるモダニズム文学の代表格ヘミングウェイの作品を、昨今のポストコロニアリズム批評理論の成果をふまえた「脱領域」(the extraterritorial) 概念の見直しによって再検討しながら、最終的に「スタイル」という文学作品の根源的要素にまでアプローチするとともに、具体的にこの作家のスタイルの根幹を成す「ハードボイルド」の要素を多方面から吟味することで、人種から性におよぶモダニズム文学そのものの可能性も照射していくという斬新な構想で貫かれ、論証の手続きも手堅い研究である。辻君は学部時代の卒業論文から修士論文を経て、長くヘミングウェイ研究を続けてきたが、博士課程ではウィスコンシン大学マディソン校に留学していっそう研鑽を積み、本論文の原型を成す各章を厳密なレフェリー制度をもつ全国組織の機関誌『英文学研究』や『アメリカ研究』に発表し、さらに練り直したうえで、この博士号請求論文を完成した。折しも審査委員のひとりであり、マーク・トウェインからヘミングウェイにおよぶ世紀転換期のアメリカ文学に造詣が深く、北米におけるアメリカ学会の会長も務めた経歴をもつスタンフォード大学教授シェリー・フィッシャー・フィッシュキンが講演旅行のため急遽来日することになったので、2010年 9月 26日(日曜日) 午前 10時より、審査委員会はその全員で口頭試問にのぞみ、以下の所感と討議の結果を得た。

まず、本論文は全体にきわめて意欲的な射程を取っており、それを完遂するために充分すぎるほどのリサーチがなされている。とりわけ、西欧文学研究の泰斗ジョージ・スタイナーからクイア批評の第一人者イヴ・セジュウィックにおよぶ多彩な批評理論を導入しながらも、それらを決して乱用することなく、各々の批評的立場をよく意識したうえで、さらに客観的、ときに批判的に援用している態度は高く評価されてよい。英文もきわめて達者である。

辻論文の独創性は、これまでマーク・トウェイン以来のアメリカ的文体として疑われることのなかったヘミングウェイのスタイルを問い直し、それが確立するのはヘミングウェイがアメリカ国内からアメリカ国外へ、とりわけヨーロッパへ離脱して国際的モダニズム運動の内部に身を置いたときからであったという洞察に集約されるだろう。ヘミングウェイの師匠格であるモダニズムの総帥ガートルード・スタインらの影響は文学史的常識として自明視されてきたけれども、じつはその影響が反映しているのはヘミングウェイ文学の氷山の一角にすぎず、彼が異国にあって複数の言語環境に身をさらし、日常的に翻訳を余儀なくされていた「脱領域」の条件をふまえてこそ、彼独自のモダニズム文学の深層が透視されるという立論は、きわめて説得力に富む。たとえば第一章で扱われるヘミングウェイの代表作『武器よさらば』の舞台は第一次世界大戦のヨーロッパで、主人公のアメリカ人フレデリック・ヘンリーはイタリア軍のために働いており複数の言語のはざまを歩き交うという国際的設定はよく知られるものの、まさにこのように国家を超えた状況に投げ込まれたこと自体が主人公の抽象的な言語への激越なる批判と決して無縁ではないとする辻君の議論は、斬新というほかない。第二章ではヘミングウェイのうちでも毀誉褒貶の激しい問題作『持つと持たぬと』が主題

に選ばれるが、辻君は作中でフロリダはキー・ウエストのバーで供される「キューバ・リーブレ」なる飲料がキューバのラム酒とアメリカのコーラの合成であることを巧みに拾い上げ、米西戦争以降のアメリカとキューバの関わりがいかにかにテクストの内部に埋め込まれているかをあぶり出し、その文脈において、英語を母語としない者たちの不正確な英会話がいかにかに効果的に演出されているかを克明に分析していく。

第三章ではリアリズム文学の巨匠であるヘンリー・ジェイムズと比較することで、モダニズム文学者ヘミングウェイの肖像を浮かびあがらせ、第四章ではかつてフィッシュキン教授がトウェイン文学の代表的主人公ハックルベリー・フィンの言語に黒人文化の刷り込みを読み取った研究の方法論を応用し発展させて、ヘミングウェイのもうひとつの代表作 *The Sun Also Rises* (1926)、邦題『日はまた昇る』の主人公ジェイク・バーンズらヨーロッパで遊び暮らすアメリカ人群像にも黒人文化の影響を認めていく。第五章においてハーレム・ルネッサンスに属する黒人作家ウォレス・サーマンの小説におけるハードボイルド文体に注目しながら、黒人文学の大御所ラルフ・エリスンのヘミングウェイ批評を積極的に援用していく手法も、創見に満ちている。

ただし口頭試問では、このように行き届いた視座から見通された壮大な射程は諸刃の剣ではないか、全体として盛り込まれているものがやや多すぎ、論文全体の焦点が最終的にどこに定められているのかがわかりにくくなってはいないか、という指摘もなされた。たとえば、論文全体のタイトルは スタイナーから着想を得た“Hemingway, the Extraterritorial”となっているにもかかわらず、論考の展開に応じてその問題意識は人種その他の問題系に組み込まれ拡散していくため、やはり本題にかかげた以上はいずれの章においても“extraterritorial”という用語を常に読者に想起させながら、議論に求心力を与えるべきであった。

また、結論でも反省されているように、黒人文学をも射程に入れたハードボイルドを論じるならば、文字どおり *Black Mask* と名乗りダシール・ハメットらを育てたハードボイルド専門雑誌のことはしっかり検証されねばならない。

以上の問題点はあるものの、全体としては質量ともに卓越したヘミングウェイ論、ひいてはスケールの大きなモダニズム文学論になっており、長年の研鑽が見事に結実していることは明白である。期せずして辻君の関心のごく最近、本論文脱稿直後に北米で刊行された Robert Paul Lamb の研究書 *Art Matters: Hemingway, Craft and the Creation of the Modern Short Story* (Louisiana State UP, 2010) とも共振していることを見るにつけ、これはすでにして先端的な研究書の域に達しているかもしれない。こうした世界的動向を改めて再確認したうえで加筆改稿を施すならば、本論文が公刊され国際的なアメリカ文学研究に大いに貢献する日も決して遠くはないことを、審査員一同は確信してやまない。

2010年 12月 7日